

みょうしんじたちゅう　たいぞういん
妙心寺塔頭・退蔵院の目玉で国宝に指定されている「瓢鮎図」

この絵は山水画の始祖といわれている如拙^{じょせつ}が、將軍・足利義持^{あしかがよしもち}の命^{めい}により描いた、彼の最高傑作と評されている。

義持の命とは、「瓢^{ひょう}箆^{たん}で鮎^{なまず}を押さえる」という禅^{ぜん}の公案^{こうあん}（禅問答^{ぜんもんどう}）を具現化できるか。

この矛盾をどう解決するか、義持は当時の京都五山の禅僧三十一人にも参詩^{さんし}を書かせた。

なお、「鮎」は「あゆ」ではなく「なまず」のことで、通常、国字（日本の文字）で「鯰」と書くが、中国由来の「鮎」で表記されている。

【註解】

○如拙（せつじょ）・・・室町時代の禅僧で、宋元画を学び日本の水墨画を開拓した画僧^{がそう}の先駆者で

雪舟^{せつしゅう}も「わが師」と呼んで私淑^{ししゆく}したと言われている。当時、禅宗と絵画は深く結びついていた。

○禅の公案（ぜんのこうあん）・・・公案とは、禅宗の修行僧が悟りを開くために参究する課題のこ

と。仏祖が示した道や教えそのものを指すこともあれば、すぐれた禅者の言葉や動作を記録し、修行僧に与える課題となることもある。

目的は、修行者がこの公案を深く考え、熟考することで、理性的な理解では到達できない悟り（見性）を目指します。

有名な公案には、「隻手^{せきしゅ}の聲^{せい}」、「狗子^{くし}仏性^{ぶつしょう}」、「祖師^{そし}西来意^{せいらいい}」などがある。

○参詩（さんし）・・・難解な公案を解決するための禅僧たちの様々な思索や悟りの境地を表現した漢詩のこと。